



— 口腔機能低下症の診療を実施している医院の事例を紹介します —

「口腔機能低下症」は、う蝕や歯の喪失など従来の器質的な障害とは異なり、いくつかの口腔機能の低下による複合要因によって現れる病態。7つの下位症状のうち3項目以上該当する場合に「口腔機能低下症」と診断されます。詳細は日本歯科医学会発信の「口腔機能低下症に関する基本的な考え方」をご参照ください。

▶義歯新製の場合は有床義歯咀嚼機能検査も実施 超高齢社会を迎えた今、義歯治療における 咀嚼機能検査の可能性を考える

— 口腔機能評価、欠損範囲の拡大への補綴的対応と舌のトレーニング —

高齢者の口腔リテラシー向上や「8020運動」の活動により、口腔の健康状態が改善し、歯列を残しながらの機能回復が増えています。口腔内の欠損形態が変化する中、咀嚼機能検査は重要な役割を果たしています。一般の歯科医院でも咀嚼機能検査による客観的な評価が有用であり、患者さんご家族にもわかりやすく説明ができます。高齢者の口腔内治療では、口腔の問題を客観的に評価し、機能回復のために適切な義歯形態を選択する必要があります。

院内システム

【対象患者】

65歳以上の口腔機能低下症が疑われる患者さん

【初回検査時】

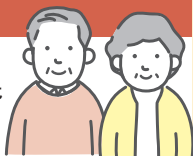
問診表に低下症の内容・初診時検査項目に口腔機能検査を追加

【処置・機能訓練】

補綴治療、唾液腺マッサージ、あいうべ体操、ペコぱんだを用いた舌抵抗訓練、嚥下おでこ体操

【管理】

メンテナンスに合わせ管理を実施
低下症該当者には半年に一度検査を実施



X月Y日 口腔機能精密検査
→該当・義歯新製の判断
(咀嚼能力検査の結果を
義歯装着前の結果とみなす)
口腔機能管理
X月Z日 義歯新製
有床義歯咀嚼機能検査1口(装着後)
X+2月及びX+4月
口腔機能管理
義歯の調整
有床義歯咀嚼機能検査1口
X+6月 口腔機能精密検査
→非該当(低下症から回復)

表1 口腔機能低下症と義歯新製の例

Point! 義歯の新製をする場合は有床義歯咀嚼機能検査を実施。

Point! 機能訓練では動画を活用。

Point! メンテナンスの中で歯周治療+X線診査(パノラマ・デンタル)の日、歯周治療+低下症の検査の日など半年単位で計画的に実施。

症例



患者:89歳 男性

主訴:他院にて抜歯になる歯が多くあるとの説明を受けて不安になりセカンドオピニオンにて来院。
口腔内診査の結果、抜歯となる歯が多く、治療に際しては義歯治療が必要であることを説明。

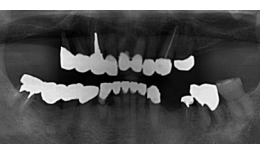
〔検査当日〕2021年3月、口腔機能検査を実施。5項目が該当し、口腔機能低下症と診断。口腔内診査の結果、上顎前歯に数本の抜歯となる歯が存在したため、義歯治療を行うこととなった。多くを求めることが困難な全身状態のため舌圧の強化のために舌抵抗訓練(ペコぱんだSを1日3回)を中心に指導。

〔治療内容〕上下ともに歯周病の進行している歯に関しては抜歯を行った。脳血管疾患、糖尿病があり、観血的処置は口腔外科と連携して行った。

〔治療後再評価〕2022年5月、再評価の検査を実施。5項目が該当し口腔機能低下症と診断。ペコぱんだを用いた舌抵抗訓練は継続している。抜歯後、義歯の装着。有床義歯咀嚼機能検査を実施した結果、咀嚼機能が123→149mg/dLに向上した。抜歯になることに不安があった患者さんにとって、咀嚼機能が低下しなかったことは大きな価値があると考えている。



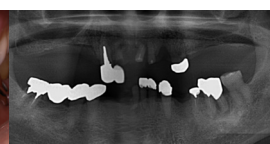
①初診時 咀嚼機能検査結果123mg/dL
図2 症例写真



②抜歯後



③義歯新製後
咀嚼機能検査結果149mg/dL 義歯の新製により咀嚼機能が改善



	初回	14か月後
口腔衛生状態(%)	22.2	11.1
口腔乾燥	17.0	14.0
咬合力(咬合力検査、N)	50.5	147.3
舌口唇運動機能(回/秒)	/pa/ 4.8	4.8
	/ta/ 4.8	3.8
	/ka/ 3.4	3.4
舌圧(kPa)	6.8	13.8
咀嚼機能(咀嚼能力検査、mg/dL)	123	149
嚥下機能(EAT-10、点)	14	14

図1 機能訓練に活用する動画

出典:名古屋市公式YouTubeチャンネル まるはちゅーぶ(名古屋市)
“見て学ぶ! なごやフレイル予防ムービー パート3「お口の健康」”
<https://youtu.be/ws-TxseDV8s>



患者さんはいつも娘さんと一緒に、月に一度のペースで来院されています。表情の変化はあまり見られませんが、院長とお会いになる時は笑顔が見えます。最近、少しずつではありますが耳が遠くなり、歩行スピードもゆっくりになってきました。意思の疎通が難しくなってきましたが、しっかりと伝えた伝え方であれば、きちんと理解して実行してくれます。歯科衛生士としては、検査の重要性を患者さんに理解していただき、その都度の記録を取り続けることが、患者さんの変化を感じ取るための大切なステップだと思います。また、患者さんの変化に敏感に気づき、舌圧のトレーニングなどの提案を通じて、患者さんの生活の質(QOL)向上に貢献できると信じています。これからも、歯科衛生士として、細かな変化を見逃さず、気配りのあるケアを提供していきたいと考えております。(歯科衛生士 大谷しおりさん)

※2023年8月現在の情報です。

